

自然誌 だより

Natural history



三重自然誌の会情報誌 144号

2025年 6月

春なのに

春たけなわ、草木も萌ゆる時期ではあるのですが、最近の山々はどうもようすが変です。先日、所要があって訪れた御池岳でも、大木の新緑は美しいのですが、低木や下草がほとんど見られないのです(写真-1)。山頂直下で萌えている草があると思ったら、一面がバイケイソウでした(写真-2)。これらの景観はすべてシカが作り出したもので、他の動植物に大きな影響を及ぼしています。餌となる多くの植物は直接的な被害を受けますし、シカ同様に草食であるカモシカやスミスネズミも激減しているとされています。バイケイソウのように、有毒の植物だけが残っているのですが、それさえもシカは食べることがあるようです(写真-3)。シカだけではなく、平日にもかかわらず登山者の多さにも驚きました。皆さんスマホを手に移入種のシマリス(写真-4)やクマガイソウが目当てのようで、これらの情報はウェブ上で流れているそうです。シマリスを撮るためにナッツを置く人もいることを、登山者の方に教えてもらいました。野生動物、ましてや移入種への餌付けなどあってはならないことです。ので、せめて登山口に啓発看板を設置すべきと思います。



写真 1. 高木だけの森(コグルミ谷長命水付近)、2. バイケイソウ群落のなかで採餌するシカ(御池岳8合目付近)、3. シカの採餌痕があるバイケイソウ(長命水付近)、4. シマリス(長命水付近)、いずれも2025年5月8日撮影。

(清水 善吉：松阪市日丘町 1386-17)

ようこそ三重県産アマオブネガイのファミリーに!

中 野 環

アマオブネガイ科の貝類は温帯から熱帯域の潮間帯や河川の淡水域に生息するファミリーで、三重県にはアマオブネガイ、アマガイ、ヒロクチカノコ、カノコガイ、ヒメカノコ、イシマキガイ、キンランカノコ、ウミヒメカノコ、キバアマガイの9種の記録があります(松本1994, 中野・中2018, 中野2021)。新たに3種類の生息を確認したので報告します。

1種目はオオアマガイで、紀伊半島以南の波あたりの強い岩礁域の転石帯に生息する種です。2021年12月26日に南伊勢町で大小6個体を確認しました(写真-1,2)。同地では、2022年以降は再確認できませんでした。2025年1月2日に少し離れた海岸で、軟体部が残った状態で打上げられた殻高4.34mmの小型個体を確認することができました。また、2024年12月25日には、紀北町で殻高19.43mmもある大きな個体を確認しています。

2種目はフトスジアマガイで、紀伊半島以南の波あたりの強い岩礁域の潮間帯に生息します。2024年12月28日に南伊勢町で殻高10.5mmの小型の個体を確認しました。2025年2月27日には同町の別地区で殻高約18mmの大きな個体を4個体確認しました(写真-3,4)。

3種目はリュウキュウアマガイで、紀伊半島以南の岩礁域の潮間帯に生息する種です。和歌山県では近年、見かけることが多くなったようです。沖縄県では岩場、和歌山県では転石の隙間から採集しています。三重県では、2024年4月13日に紀北町の海岸で打上げられた1個体を得ました。何度か採集を試みたところ、2025年2月23日に生個体を確認しました(写真-5)。また、2025年2月24日には志摩市志摩町でも生個体を確認しました(写真-6)。

2021年2月に三重県内で始めてキバアマガイを確認してから4年が経過します。暖かい海域に生息する種類という認識でしたが、現在では、紀北町から志摩市志摩町にかけて個体数も増え、大型の個体もあります。今回報告した3種は、今のところ生息地および個体数は限られていますが、今後、どのような動向をするのか継続観察したいと思います。



写真 1. オオアマガイ背面(南伊勢町), 2. オオアマガイ腹面(南伊勢町), 3. フトスジアマガイ(南伊勢町), 4. フトスジアマガイ(南伊勢町産), 5. リュウキュウアマガイ(紀北町産), 6. リュウキュウアマガイ(志摩市志摩町)

引用文献

松本幸雄1994. 「三重の貝類」追加目録. 三重動物学会会報, (17) : 9-28.
中野 環・中 優2018. みえ生物誌一貝類. 三重自然誌の会, 205pp.
中野 環2021. 三重県におけるキバアマガイの記録. 自然誌だより, (129) : 3.

(なかの たまき：度会町大野木1711-1)

ようこそ三重県産タマキビガイのファミリーに！（その2）

中 野 環

2025年5月5日，連休中の混雑を避けて，南伊勢町贅浦から田曾浦の海岸で，高潮帯に生息するタマキビのなかまを観察しました．やや内湾的な環境では，タマキビばかり目につきますが，外洋に面した海岸では，多くのアラレタマキビに混じり，イボタマキビやタイワンタマキビ，ホソスジウズラタマキビもポツポツと確認しました．この地域の海岸線は入り江が多い複雑な地形をしているので，次の観察場所に移動するのにかなりの時間を要します．田曾浦に到着したのは，日没間近の時刻でした．小さな貝が見つらくなってきたので，観察を終わろうと思っていた時です．灰青色をした一つの貝が目に入りました（写真1）．

「コウダカタマキビや！」思わず声が出ました．本種は，紀伊半島・八丈島以南に分布する岩礁域の高潮帯にみられる10mmほどの大きさの種です．和歌山県串本町では10年以上も前から生息が確認されていますが，冬の寒さに耐えられないのか，近年生息域が拡大しているホソスジウズラタマキビほど個体数は増えておらず，これまで三重県からは記録がありません．2個体目は発見できませんでした，これで10種のタマキビガイ科の貝類が三重県で確認されたことになります．今回確認した個体のサイズは，殻高11.79mm，殻幅6.79mmでした（写真2）．



写真1 コウダカタマキビの生息状況(南伊勢町)

2020年には南伊勢町でホソスジウズラタマキビを1個体確認しました(中野2020)．現在では尾鷲市から志摩市にかけての海域で確認できます．また，2003年に紀北町でヒメウズラタマキビが1個体確認されてから21年が経過した2024年には，尾鷲市から南伊勢町の海域で確認されるようになりました(中野2025)．黒潮大蛇行の影響を受け，これまでみられなかったホソスジウズラタマキビやヒメウズラタマキビ，コウダカタマキビなどの南方系の種が北に分布を広げてきた可能性はありますが，2025年5月9日，気象庁は7年9ヶ月続いた黒潮大蛇行終息する兆しがあることを発表しました．今後，コウダカタマキビは分布を広げるのか観察を続けていきたいと思ひます．



写真2 コウダカタマキビ標本(南伊勢町産, TNC-Mo.No.22887)

引用文献

中野 環2020. ようやく手にした三重県産ホソスジウズラタマキビ. 自然誌だより, (125) : 6.
中野 環2025. ようこそ三重県産タマキビガイのファミリーに！. 自然誌だより, (143) : 6-7

(なかの たまき：度会町大野木1711-1)

ニホンジネズミを津市久居一色町で確認

上 田 利 彦

2025年2月16日、我が家の裏にある畑で、はやくも動き始めた雑草を芽のうちに摘んでしまおうと作業をしているとき、昨年秋に寄せ集めてあった枯草の上に小さな哺乳類の死骸を見つけました。大きさにカヤネズミかと思いましたが、目が小さく吻が細長くとがっておりネズミというよりヒミズに似ています、しかし毛の質感はネズミに近く、また色もヒミズは黒褐色ですがこの個体は灰褐色でした。自分の乏しい知識の中でいろいろ考えながら、とりあえず自然誌の会のLINEグループに写真を投稿、清水善吉さんからの返信を待った結果、ニホンジネズミと教えていただきました。ニホンジネズミ *Crocidura dsinezumi* はトガリネズミ科でネズミと名がつくもののモグラに近い仲間で、林や農耕地に生息し地中ではなく地表で生活しているそうです。また、モグラの仲間ではあるものの尾が長いとのことでしたが、残念ながら見つけた個体は左後肢と尾が欠損していました（写真1）。

今回の確認は、もともと茶畑であったところを茶の木の畝を残しながら1mほどの畝間を耕し畑とし、一角のわずかな空間にクヌギやシイ類の雑木を植えた植生と、その樹間にシイタケの柵木を置いた里山の薪炭林を模した環境です（写真2）。小型哺乳類はこれまでにコウベモグラ、カヤネズミ、アカネズミ、クマネズミを、またその捕食者としては、イタチ、アカギツネ、モズ、チョウゲンボウ、アオダイショウ、シマヘビなどを確認しています。今回の捕食者は、季節的に爬虫類はあり得ず、個体の大きさや損傷具合からはモズが捕獲し「はやにえ」を作るのに失敗したのではないかと推察しています。確認したのは常緑のシイノキの下で獲物を刺せるような枝はありませんが、やや離れた位置にブナの木があり、これまで我が家の庭にあるブナの木ではトカゲやイナゴ、アマガエルのはやにえを確認しており、可能性として一番高いのではないかと思います。

ニホンジネズミを検索するとキャラバン行動をすると紹介されていました。清水さんからヤチネズミのキャラバン行動の話聞かせてもらっていますが、もしかするとうちの畑でも見ることができるのでは！と期待してしまいます。

みえ生物誌（三重自然誌の会 2018）によると、県内に広く記録があるものの多くはなく、津市内では美杉町川上での記録があるのみで、近隣では松阪市嬉野町で2件の記録があります。平地から山麓までの広い範囲で生息するようですが、なかなか目にすることができない種のようにです。

今回の記録は我が家の小さな里山ビオトープのポテンシャルもなかなか捨てたものじゃないなと思える出来事でした。



写真1 ニホンジネズミ（2025年2月16日，津市久居一色町）。



写真2 確認場所は右下の枯草・枝の上。中央はクヌギ、左にブナ、奥はシイ、緑の葉はチャノキ。

（う え だ と し ひ こ：津市久居一色町176-1）

南伊勢町のモリアオガエル（その4）

中 優

今回は南伊勢町伊勢路のモリアオガエル（写真-1）の産卵場所について、4回目の報告である。
過去3回（自然誌だより84号（2010）、136号（2023）、137号（2023））で報告した産卵場所は5ヶ所である。これに本年（2025）新しく確認した1ヶ所を含む6ヶ所の状況を下表に示す。



写真 1.モリアオガエル（2024年6月4日・撮影）、2.地点Aの卵塊、3.地点E'の卵塊、4.地点Cの卵塊、5.地点Dの卵塊

表 南伊勢町におけモリアオガエルの産卵数（2025年）

地点	場所の概要	確認した日※1	産卵数	備 考
A	鍛冶家トンネルを南伊勢町側に抜けた山側	5/5	0	本年も安定した産卵がある。 2024年は大きく4月と6月に2回の産卵ピークがあった。
		5/10	確認、計数せず	
		5/31（写真-2）	40	
B	倒産した養鶏場の鶏糞処理場 近くのサニー道路の山際	5/5	0	2022年初めて産卵を確認。 2023年も確認したが、2024年は確認できず。
		5/10	0	
		5/31	0	
E'	地点Eから伊勢市方面に県道を100mほどいった山側	5/31（写真-3）	1	本年初めて産卵を確認
E	以前鶏場の売店があった場所から伊勢路集落方面に県道を200mほどいった山側	5/5	0	2023年初めて産卵を確認。 2024年は確認できず。
		5/10	0	
		5/31	0	
C	地点Dの池の伊勢市側手前を山側に入ったところにある浅い池	5/31（写真-4）	4	
D	自然誌だより84号で報告した池	5/5	2	確認、計数せず
		5/10		
		5/31（写真-5）	18	

※1 毎日調べているわけではない

（なか まさる：伊勢市小俣町本町1284）

船越大池にトキソウが戻ってきた！

山 本 和 彦

志摩市大王町船越の熊野灘に面した海辺に船越大池と呼ばれている海跡湖があります。海跡湖とは数千年の昔、小湾が潮流によって運ばれた土砂によって閉ざされてできた湖で、リアス海岸が発達する志摩半島から熊野灘沿岸部に多く見られます。池は周囲約1.6km、面積約6haの広さを有し、その内、止水域は1haほどで、大部分はアンペライ群落が発達する湿原となっています(図1)。この湿原や池の水辺には三重レッドリスト2024に絶滅危惧種として掲載されているテツホシダ(ヒメシダ科)やオオクグ(カヤツリグサ科)、シログワイ(カヤツリグサ科)、アンペライ(カヤツリグサ科)、エゾミソハギ(ミソハギ科)、シロネ(シソ科)、ドクゼリ(セリ科)、トキソウ(ラン科)や他にもいろいろな湿生植物が生育しています。とくにオオクグやエゾミソハギ、テツホシダは、現在、県内ではここで見られない植物となっています。また、ここには国内希少野生動植物種に指定されているベッコウトンボ(トンボ科)がかつて生息していたことでも有名です。

船越大池は、湿生植物相、昆虫相などが豊かであることから三重県における希少野生動植物主要生息生育地(ホットスポットみえ)の一つに選定されています。さらに池やその周辺は、伊勢志摩国立公園の第3種特別地域にも指定されています。この湿原の大部分は背丈1mを越えるアンペライの群落で、湿原の一部を除いてほぼ全域に広がり、群落内には他の植物が入り込めないほど密に茂っています。1995年に初めてこの池を訪れた時にもアンペライ群落が目立っていましたが、現在ほどの広さではなかった記憶があります。当時はアンペライの多さもさることながら、湿地生植物と水草類が豊富なことに目を見張った覚えがあります。さらに興味深かったのは、アンペライがきれいに刈り取られ、明るくなっている立地にトキソウが一面に生育し、ミズオトギリ(オトギリソウ科)、ホザキノミミカキグサ(タヌキモ科)、チゴザサ(イネ科)、シロネなどの植物も多く見られ、豊かな湿地生植物群落

が出現していることでした。この群落は面積にして200~300m²程度でしたが、周囲が高さ1mを越えるアンペライが生い茂る中にあって興味深い光景でした。この光景は10年後の2005年に訪れたときにも大きく変わっていませんでしたが、2019年に再訪した時には、状況は一変していました。かつてのトキソウ群落地は、高さ1mを越えるアンペライによって覆われ(図2)、トキソウはその下で花をつけることもできず、葉だけを出してかろうじて生存しているという状況でした。しかも個体数は激減し、数えるほどしか残ってなく、他の湿地生植物も消滅あるいは

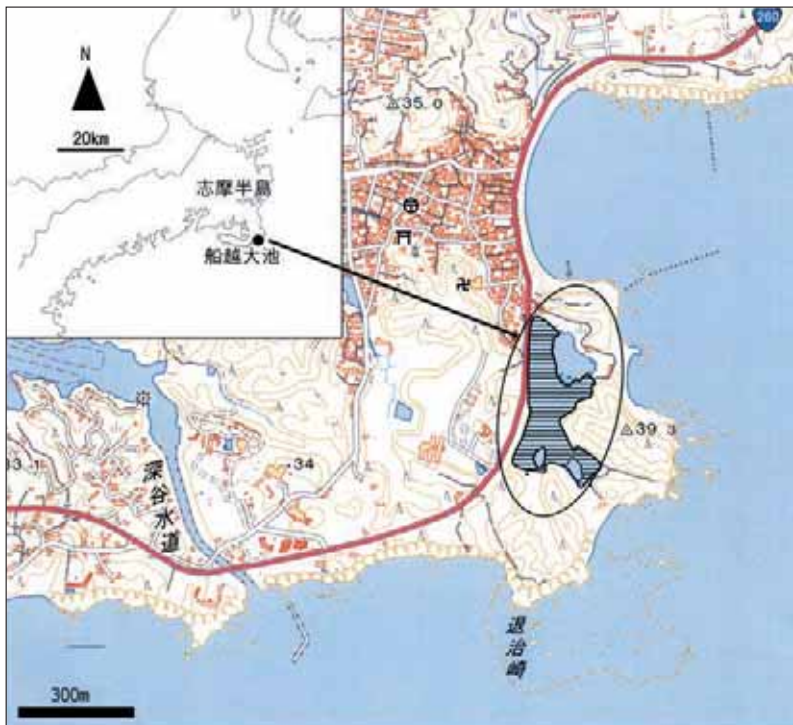


図1 船越大池位置図と船越大池におけるアンペライ群落 (■)。



図2 2019年当時のトキソウ群落地(2019年9月23日撮影)。
アンペライが繁茂し、地面が見えない。トキソウや他の湿地
生植物はアンペライに被陰され激減、消滅していた。



図3 アンペライ刈り取り後のトキソウ群落地(2024年5月11
日撮影)。図2とほぼ同じ位置の刈り取り後の状況。周囲に
比べアンペライの密度、高さとも低くなり、トキソウやホザキ
ノミミカキグサなどの湿地生植物が復活しだしている。

激減していました。アンペライ刈りは稲藁の代用として畑に敷いたり、草履の材料としたりするために行われてきましたが、最近ではそのようなことがほとんどなくなりアンペライ群落が復活したためです。人がアンペライ刈りを行うことにより明るい湿地ができ、そこにトキソウをはじめ、いろいろな湿地生植物が生育できる環境が形成され、維持されてきたと言えます。

2019年～2020年にかけて伊勢志摩国立公園自然ふれあい推進協議会は船越大池の現況調査を行い、アンペライ等の繁茂によりトキソウをはじめとした湿地生植物が衰退しつつあることを指摘しています(伊勢志摩国立公園自然ふれあい推進協議会 2020)。これを受けて地元の有志の方々がかつての湿原景観を取り戻そうと「おいけクラブ」を結成し、環境省、伊勢志摩国立公園管理事務所と協力してアンペライ刈り取り作業を実施することになりました。刈り取り作業は2023年度には12月と3月の2回、2024年度は12月に1回行われ、さらに今年度も予定されています。作業が行われた翌年(2024年)の5月にはトキソウの開花個体がいくつか散見され、ホザキノミミカキグサもわずかですが確認されました。この(2025年)5月にも現地を訪れたところ、2024年よりさらに多くのトキソウが出現しており、その内半分ほどが開花している状況でした(図3、4)。他にエゾミソハギ、シロネ、ミズオトギリ、チゴザサ等の湿地生植物も目立っていました。アンペライは高さ、密度とも刈り取りの行われていない周囲に比べかなり低くなっており(30cm前後)、刈り取りの効果が鮮明に現れていました。2005年にこの群落地を調査した藤井伸二氏は、湿地生植物種が非常に豊富で、とくにホザキノミミカキグサが豊富なことには驚かされると報告しています(藤井 2006)。今後の刈り取り作業によりこのような湿原植生が復活することが期待されます。



図4 個体数が増加しつつあるトキソウの花
(2025年5月24日撮影)。

文献

藤井伸二 2006. 船越大池のアンペライ刈りと低湿地の植物. *Nature Study*, 52 (7), 12 (88).
伊勢志摩国立公園自然ふれあい推進協議会 2020. 2019年度船越大池植物調査報告書. 環境省横山ビジターセンター内伊勢志摩国立公園自然ふれあい推進協議会.

(やまもと かずひこ：尾鷲市小川西町8-40)

松阪市での動物情報二題

宮 本 佳 典

① ニホンカモシカを目撃

蓮ダムにおいて国の特別天然記念物であるニホンカモシカ *Capricornis crispus* 1頭を下のとおり確認した。

確認日 2025年4月19日（土）10：20頃（図1）

場 所 三重県松阪市飯高町猿山（蓮ダム周回道路法面）（図2）

蓮ダム周回道路のコンクリート吹付け法面中段付近にいた個体が、悠々と餌を食べながらゆっくりと斜面を登っていき林内に消えて行った。



図1 確認したニホンカモシカ



図2 同確認地点



図3 事故死したハクビシン

② ハクビシンの交通事故死

我家の前の歩道でハクビシン *Paguma larvata* 1頭を下のとおり確認した。

確認日 2024年12月1日（日）6：30頃（図3）

場 所 三重県松阪市大黒田町新田（国道166号 自宅前）

朝6時過ぎ、近所のスーパーの駐車場にあるコイン精米機へ米を搗き行き、20分もしないうちに帰宅すると、自宅前の歩道上に車に撥ねられたと思われる本種が死んでいた。

本個体について当会事務局の清水善吉氏に現物が必要かどうか問い合わせると、現物は不要だがデータ（場所、写真等）は必要との返事とともに、「ハクビシンは食すと美味しいらしい」という情報をもらったが、さすがに食す勇氣は持ち合わせていなかった。もし、ハクビシンを食した経験のある方がいましたら、是非食味等の感想をお聞かせ下さい。

なお、この日は日曜日であったが、道路管理者（国道事務所）に連絡を入れ、翌月曜日に回収してもらった。

（みやもと よしのり：松阪市大黒田町886-3）

編 集 後 記

こここのところ原稿が少なめで困っております。会報は、1989年の会設立以来季刊を維持しており、その時々県内の自然にまつわる記事を中心に掲載しています。書き手が偏らず、いろいろな人の観た・考えた自然を記録しておきたいと思っておりますので、ご投稿をお待ちしています。なお、投稿を躊躇する会員さんのなかには、このようなうすい会報に原稿を載せても記録が散逸してしまうのではないかと危惧されている方もみえるかもしれません。これについては、50号毎に製本し、県立図書館等に寄贈していますので、ご安心ください。次号は9月発行予定ですので、早めの準備をお願いします（善）。

自然誌だより144号 Mie Natural History Research Group News, No.144

発行日 2025年6月25日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）

e-mail:shimizuzenkichi@gf7.so-net.ne.jp